



竹 生 島

びわ町文化財専門委員
早 崎 観 縁

竹生島は奈良時代のすぐれた僧侶^{ぎょうぎ}行基によって開かれたとされる古い寺であります。それ以来、祈禱^{みだしよ}仏教の道場として、観音信仰の札所として、戦国武将の祈願寺として、また小島が地霊の宿る聖地としてなど、いくつもの信仰によって栄えてきました。そして、昭和5年、国の名勝、史跡に指定されました。

竹生島には新旧2種類の縁起が伝承しています。それらによると、竹生島は天平10年(738)聖武天皇の命を奉じた僧^{ぎょうぎ}行基が、修行の霊場をもとめて諸国を巡回した時、竹生島に渡り不思議な力を感じ、草庵を作って住みつき、国家の安泰と国民の繁栄を願って、二尺の四天王像を小堂に安置したのが始まりで、

その小堂を竹生島寺と称し、東大寺に属していたといえます。

東大寺三綱紀(内閣文庫蔵)に、

近江末派之部

竹生島寺 在浅井郡湖中

僧房十六字

本尊大辯才天女

行基開基

とあり、僧房十六字とあるのは、かなり寺観がととのっていた状景をうかがわせるものがあります。

本尊大辯才天女は岩波仏教辞典によると、弁天と略称し妙音天ともいう。インド最古の聖典『リグ・ヴェーダ』のなかにあら



竹 生 島 全 景 (都久夫須麻神社提供)



本尊大辯才天標石 (宝厳寺提供)

われる河川の神。水の女神、豊穰の女神で後代には言葉の女神となり、学問・芸術の守護神とされ、特に詩人によって尊崇された。また弁財天と記される場合は、財福神の性格を示す。形像は、八臂又は二臂で、白衣をまとい白蓮華の上に坐り琵琶を持つ。音楽・弁才の神としても信仰され、日本でも弁才の祀堂は湖辺・海辺にある。七福神の一人。

とあります。

竹生島宝厳寺には多量の古文書が保管されていますが、その一資料に「明細帳」があり、それに、

滋賀県管下近江国浅井郡竹生村

同県下同國坂田郡宮司村総持寺末

実珠宝厳寺

但し一山ノ総号

真言宗

但し往古ハ天台宗

本尊大辯才天女

と記しています。

つづいて「明細帳」は島内寺院堂宇の本尊を次のごとく挙げています。

西国三十番札所 千手観音

妙覚院 地蔵菩薩

月定院 不動明王

一乗院 薬師如来

境内仏堂八字

開山堂 行基菩薩

札納所 西国三十三所観音各体

行者堂 役ノ小角

護摩堂 不動明王

雨宝堂 雨宝童子

妙音堂 妙音天

守護神堂 本尊ト称スル尊像無之

小島堂 法華圣十羅刹女

境内建物 三字

御供所

土蔵

接待茶所

鐘楼堂

現境内反別外建物

五輪石塔 丈ケ 七尺五寸 巾 三尺四寸 宇宮崎ニ建

門代石華表 柱間一丈一尺五寸 但し内ノリ

石塔 役行者造立ト云フ島ノ裏藤ノ崎ト云北ニ建

石華表 柱間二間三尺七寸

右者浅井郡益田村字戌免北ニ建

白蛇堂 一字 六尺四方

参籠人室 一字 二間九尺

警官出張所 一字 九尺六尺

客殿 一字 四間七間

上記のうち五輪石塔は聖武天皇供養塔とも称しています。守護神堂はさきにあげた「明細帳」に「守護神堂 巾一尺五寸行二尺 由緒 往昔当島住僧伽藍守護ノタメ天上スト故ニ堂宇ヲ建 俗ニ天狗堂ト云フ」とあり、作家白洲正子さんは好著『近江山河抄』のな

かで、行基の開創当時の竹生島は、天狗が多く住み、首領行尋坊は行基を尊崇し片時も傍を離れず、吾れ死すとも永くこの島を護らんと誓い、証拠として生爪を剥ぎとり、さし出したという伝えをとりあげています。今もそれを宝物殿のケースの中に見ることができます。

次の門代石華表は現に竹生島の石段を26段登ったところに建ち、上に向かって左側の柱に「奉寄進 遠州見付宿 太田弥七 宿坊月定院」、右側の柱には「安永八巳亥年(1779)九月良辰と彫りつけてあります。寄進人太田弥七は熱心な弁才天信者で、三重県桑名の出身、のちに遠州見付宿に転住したようであります。太田弥七の家は代々海運業を営み、古くから弁才天を篤く信仰していたことは「桑府名勝志」太田家の条に所載されており、たまたま私が入手した太田興右衛門家の系譜に徴しても立証できます。

信者太田弥七から石の鳥居寄進の申出を受けた竹生島は、当初一山の総門建立を思い立たれたようでありましたが、何分にも予定の現場がきわめて狭い、その上に傾斜地でもありますから、総門の計画をやむなく断念し、代わりに2本の丸柱の間に2枚の扉を立て、必要によって開閉自在な、総門兼用の様式に



弁才天坐像（宝厳寺所蔵・琵琶湖文化館写真提供）

変更されたようであります。それは寛政2年(1790)宝厳寺から寺社奉行に当てて提出された「堂社建前図」に「惣門」と書きあげてあるのを見ても一目瞭然で、竹生島にとっては久しく念願していた鳥居であったわけです。

竹生島宝厳寺文書のなかに「四十九院坊号の次第」を記したのがあります。これは弥勒菩薩の浄土にあったという四十九院をそのまま竹生島に作りあげ、完成しようとした開祖行基菩薩の壮大な発想にかかるもので、四十九院が文字どおり林立して実在いたしたにちがいありません。竹生島宝厳寺文書の天正4年(1576)11月吉日付けの「参百石目録」にも四十四坊が列記してありますので、およその景観を想像することができます。

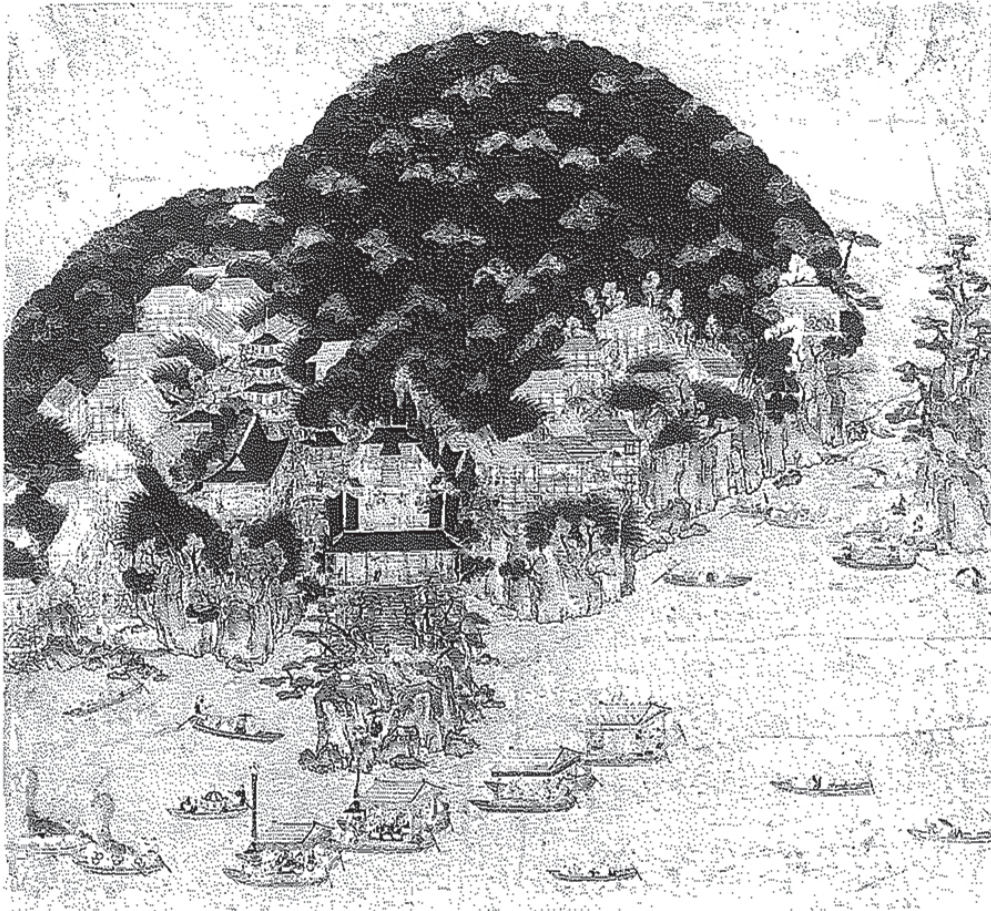
竹生島の年中行事に蓮華会があります。昭和61年7月びわ町観光協会刊行の「神を斎く島のメモリー」島の祭礼「蓮華会」の項で稻城信子さんは、

竹生島の一大行事として、蓮華会が今日も連綿と行われている。竹生島で行われる蓮華会の始まりは、源仲により撰述された『慈恵大師僧正拾遺伝』によると、貞元2年(977)のこととおもわれる。

同年(貞元2)於近江国浅井郡竹生嶋、書写法花經一百部、是為莊嚴弁才天、兼為報生地之恩、法会已後、清僧乗船廻嶋散花、同音讃歎、樂人供奉打一鞭乗龍頭鷁首船とあり、その目的は、天下大旱魃請雨之御祈禱で、雨乞いのための法会であることは明らか。つづけて、

この船渡御の様相を描いた「竹生島祭礼絵図」が、東京国立博物館と大和文華館に所蔵されている。中略……大和文華館本は江戸時代初期の作品であり、軸表右側下に「西嶋五左衛門」の名が墨書されている。

竹生島の水ぎわには「當嶋水際八町殺生禁断也」の大きな石標が建っています。竹生島文書に「御詫奉申上一札之事、文政十一年子四月 飯之浦舟主長三郎 舟年寄久五郎連



竹生島祭礼図 (東京国立博物館所蔵)

あげられている「香炉」と「瓶」は、荘厳の用具であります。荘厳の用具はそれがそこに据えられたということではなくて、靈廟における儀礼が厳として行われていたことの実証であります。なお一步踏みこんで言うならば、古き時代を生き貫いた時代の英雄としての人間個人を越えて、「御代々靈牌 七基」は祖靈でありますから祖靈に対する追善供養のいとなみであります。

名」で「鳥之玉子盗」の一件で詫びを入れているものがあります。殺生禁断、戒律厳守の当時の竹生島のありかたを直接に受けとることができます。

竹生島にはおびただしい数量の文化財が保管されています。中でも現在の「都久夫須麻神社本殿」はその最たるものです。一般的にこの建物は京都の東山に造営された豊国廟を移築したものとされていますが、身舎部分については伏見城の日暮御殿を移したとの説もあり定かではありません。また建物の性格としては竹生島宝厳寺蔵の「靈宝類諸色大概目録」には、

御靈屋

御代々靈牌	七基
太閤様靈牌	一基
香炉	一居
瓶	一対

とあって、正しく、靈廟であります。ここに

竹生島は貞永元年(1232)9月14日の全山焼亡の大火、正中2年(1325)10月の大地震、享徳2年(1453)正月の全山火災、そして永禄元年(1558)秋の全堂全焼失という悲運に遭ってきましたが、そのたびごとにそれを克服して、復旧修築が行われ、今の靈容に接し得ることは、偏えに遠近を問わず物心両面の燃えたる信仰の発露に外なりません。そして竹生島の尊厳性は永遠に継承されてゆくものと堅く信じます。

滋賀文化財教室シリーズ No.164号

発行年月日 1997年1月10日
 編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
 〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
 TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525